京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	犬山城下町の空間構造とその形成過程
Author(s)	山村, 亜希
Citation	地域と環境 (2016), 14: 1-23
Issue Date	2016-12-28
URL	https://doi.org/10.14989/224933
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

犬山城下町の空間構造とその形成過程

The spatial structure and its formation process of *Inuyama* castle town

山　村　亜　希
Aki YAMAMURA

尾張犬山は，戦国期から近世前期にかけて形成された城下町である。本稿ではその形成期を4時期に区分して景観復原図を作成し，空間構造の形成過程を検討した。戦国期の犬山城下町は，起源も機能も異なる複数の集落の集合体であった。豊臣期に「竪町型」町割と総構が施工されたが，機能面でも計画の首尾一貫性という点でも不完全な「総郭・竪町型」であった。近世中期にその不備が解消されて「総郭・竪町型」の城下町が完成する。

キーワード：空間構造，城下町，景観復原，形成過程
Key words：spatial structure, castle town, landscape reconstruction, formation process

1　問題の所在

犬山城下町は，北を木曽川に，東を美濃丘陵に接する濃尾平野の北東角に位置する。木曽川と美濃丘陵が尾張国と美濃国の国境であるため，犬山は国境の町であった。それと同時に，木曽川中上流の山地と下流の平野の接点でもあり，木曽運材の中継点として重視された。この立地の重要性により，戦国期の築城以降，城主がめまぐるしく交代した。豊臣期から近世初期にかけて尾張国主の政務代行者の城としての位置づけが確立し，元和元（1614）年の「一国一城令」の後も，藩主の名古屋城とともに，犬山城も付家老の成瀬家の城として維持された。現在，犬山城の天守は全国でも12例しかない現存天守の一つとして国宝に認定され，全国的にもその名が知られる。

このような歴史的重要性と知名度の高さに反して，犬山城下町の空間構造にいかなる特徴があり，どのような過程を経て形成されたのかは，十分に明らかにされてこなかった[1)]。最古の犬山城下町図である正保4（1647）年の「尾張国犬山城絵図」[2)]をみると，犬山城下町は城郭の最外郭（総構）が城下町全体を囲う「惣構え型」（矢守 1970）ないし「総郭型」（矢守 1988）である。町人地に関しては，町通りが城地に対して竪方向に走る「竪町型」（矢守 1988）プランである。この明快な「総郭･竪町型」城下町は，どのようにして成立したのだろうか。本稿は，犬山城下町の形成期にあたる戦国期から近世初期に焦点をあて，城下町の空間構造の形成過程を明らかにすることを目的とする。

本稿では具体的には，時期区分を行って，それぞれの段階における景観復原図を作成する。しかし，戦国期から近世初期において城下町の建設に関連する文献史料[3]は少なく，城下町の発掘調査も乏しい。その一方で，寺社，町，街路等の来歴については，『犬山里語記』などの近世地誌[4]に，信憑性は劣るものの多くの情報が見られる。正保4年図以降，数多く作成された犬山城下町図[5]は，それ以前の形成期を直接物語るものではないが，詳細に分析すれば，多くの形成期の痕跡が記されている。これらの史資料の特性をふまえた上で，情報を相互に照合する，個別断片的な地理情報を統合するといった分析の余地は多く残されている。

そこで本稿では，戦国期から近世初期にかけての同時代史料と近世地誌類を網羅的に調査し，城下町図の記載と対照させて，犬山城下町を構成した寺社，町，街路等の来歴と位置といった空間情報を整理する（表1）。そして，城主の変遷を基準として，戦国期（1537年頃～1590年），豊臣期（1590年～1600年），小笠原吉次・平岩親吉期（1600年～1617年），成瀬初期（1617年～17世紀）の4時期に区分し，それぞれの時期における諸施設の位置と形態を可能な限り実証的に地図化する（図1～4）。なお，本文中で諸施設の位置や来歴に言及する場合，表1にその史料的根拠を示しているので，本文では重複を避け，史料名等を記載しない。表1を参照されたい。

2　原型としての戦国期城下町

1）戦国期犬山城の立地

図1は，天文6（1537）年頃から天正18（1590）年までの犬山城下町の景観復原図である。守護斯波氏と守護代織田氏が二分して争った応仁の乱以降，尾張は北部を領有する岩倉織田氏と南部をおさえる清須織田氏の分割支配となった[6]。岩倉を本拠とする守護代織田敏広の弟広近は，北部岩倉方の拠点として犬山の南方の小口に居城を置き，さらに美濃に対する備えの城として文明元（1469）年に木ノ下城を築いた。天文初年頃に，岩倉織田氏広近の子寛近の跡を，清須織田氏の三奉行の一家から急速に台頭した織田信秀の弟信康が継いだとされてきたが，近年の研究では，それを否定し，天文20年頃まで岩倉織田氏系の寛近，ないしその弟の宗伝が犬山を支配していたとする（横山2012，白水2017）。

このような時期に，今の城山にあった白山社（針綱神社）を移転させて，犬山城が築城されたと考えられる。城山から移転させられた白山社の獅子頭刻銘に，天文6年に大工五郎左衛門尉近佐が東之宮に寄進したとある。ここから，既に天文6年時点で白山社は城山ではなく，東之宮（東宮山）に存在したことが知られる。白山社が旧地を離れて東宮山に立地する理由は，城山への築城以外に想定しがたいので，本稿では少なくとも天文6年までには城山に築城されていたと推定する。

白山社の社伝によると，往古の額に「郡中総社白山針綱大神宮」とあったとされ，白山社が丹羽郡における信仰の拠点であったことが推測される。この場所を選んで築城した理由の一つ

表１　犬山城下町における諸施設の存在時期・位置とその根拠

名称／宗派	史料名：存在年，来歴／史料名：位置
針綱神社（白山大明神）	延喜式神名帳：針綱神社／里：丹羽郡の惣社白山社，城山にあり～里：天文 6（1537）織田信康，東の丸山（白山平，東宮山）へ移す，市史 3-44 獅子頭刻銘：天文 6（1537）東之宮に大工五郎左衛門尉近佐寄進【1537 年までに東宮山に移転】～市史 3-45 棟札銘：天正 15（1587）白山大明神～里：慶長 12（1607）名栗町の八幡宮社地へ移転／正保 4（1647）①：名栗町・鍛冶屋町の角～市史 3-159-3：寛永 5（1628）白山 2 社，薬師寺所有の大本町龍雲寺屋敷に移転～市史 3-43 梵鐘刻銘（妙感寺）：寛永 20（1643）白山妙理大権現と八幡大菩薩を併記【八幡神を吸収し，同一境内に存在】～寛政 3（1791）④：白山社の北区画に町屋なし【町屋を撤去し，直後に境内拡大】～明治 15（1882）県社の指定を受け現在地（城山）へ移転
三狐尾寺（三光寺）・三狐神社	鵜沼記（『美濃国雑事記』市史 3）：三光寺山に三光寺あり～里：織田信康，築城時に三狐神を移転～里：天正年間に移転／寛政 3（1791）④：中切に「神宮寺」～社伝：明治 9（1876）三光寺山に移転～城山に現存（三光稲荷神社）
稲木神社・田中天満宮	延喜式神名帳：稲木天神／里：犬山東田圃の中，田中の森（字天神）。近辺の住人が富岡村と木下村に移転～里：天正の頃，近辺の天満宮を合祀～里：明和 4（1767）余坂村へ移転／寛文 8（1668）②：余坂の東西道両脇に一里塚，寛政 3（1791）④：「天神」【一里塚の場所に勧請】
愛宕権現・愛宕山長泉寺延命院	市史 3-159-6：慶長 10（1605）長泉坊，愛宕大権現・稲荷大明神・熊野大権現・山王大権現を勧請，市史 3-78 小笠原吉次判物：慶長 10（1605）長泉坊に，犬山の内，愛宕屋敷藪共に寄進，町次諸役一切免除／里：木ノ下城の跡地を寄進～里：慶長 11（1606）鍛冶兼常，自宅裏に勧請／里：鍛冶屋町～市史 3-74 棟札銘：慶長 11（1606）兼常長泉坊の本願により新社を造営～市史 3-76 棟札銘：慶長 12(1607) 兼常長泉坊の本願により舞台を造営，市史 3-77 棟札銘：慶長 12 拝殿を新造／正保 4（1647）①：現在地に「寺」
牛頭天王社（三宅神社）	里：慶長 10（1605）小笠原吉次，中島郡三宅村から勧請，南向きに造営～里：安永 9（1780）東向きに改修／天和元（1681）③：現在地に「天王」
大縣社	里：境内にあった春日社と合社，寛永 15（1638）再興。古墳跡に造営。大縣宮の神主野呂一族 7 人が周辺に居住し七軒町という／正保 4（1647）①：現在地に「宮」【尾張二宮大縣社の末社か】
神明社	里：元亀 2（1571）創建／天和元（1681）③：現在地に「神明」
熊野社	市史 3-55 長尾常閑黒印状写：天正 18（1590）長尾吉房，法花宗寺惣坊中に東西 40 間余南北 30 間余の熊野町の屋敷を寄進【熊野社もこの時点には存在か】～社伝：寛文 8（1668）再建／天和元（1681）③：「熊野　先聖寺」
日輪山常満寺／浄土宗	里：正応 4（1291）創建～市史 3-49：永徳 4（1384）2 造立 12 世蓮実の逆修塔～市史 3-50：永享 11（1439）1・27 銘の宝筐印塔／正保 4（1647）①：現在地に「寺」，寛文 8（1668）②：現在地に東に門を開ける寺院～明治 7（1874）犬山城松ノ丸裏門を山門に移築
一部山専念寺／浄土宗	里：弘治元（1555）犬山城主池田恒興建立。専念寺前の人家は昔の御樹木屋敷～寺伝：池田恒興，小笠原吉次，平岩親吉の菩提寺／正保 4（1647）①：現在地に「寺」，寛文 8（1668）②：現在地に東に門を開ける寺院～里：延宝年間（1673-1681）南の大門口（昔の円光院の大門）に変更／天和元（1681）③：南に大門をあける境内，門の両側に円光院と真誉院，快教院～天保 10（1839）⑤：現境内の南門東脇に円光院，崖下に薬師堂快教院
円光寺／浄土寺	里：上大本町西側，廃寺後，大門が専念寺の門になる／天和元（1681）③：「円光院」，天保 10（1839）⑭：「円光院」存続【専念寺の塔頭として存続】
龍雲寺／真言宗	市史 3-159-3：寛永 5（1628）4・21 白山 2 社移転のため薬師寺に大本町龍雲寺屋敷の替地として上本町与平次ひかへの畠 2 反を与える／里：上大本町西側（矢口・岩田氏屋敷）～正保 4（1647）①：既に廃寺，寺なし

天岳寺／曹洞宗→一翁山妙感寺／日蓮宗	里：下大本町東側（今井氏屋敷地）に天岳寺あり，無住となる～里：寛永 17（1640）再興，日蓮宗に改宗～**市史 3-43 梵鐘刻銘：寛永 20（1643）旧銘「犬山白山妙理大権現八幡大菩薩」に追銘【**妙感寺，白山・八幡社の梵鐘を入手**】／寛文 8（1668）②：寺院描写あり**～里：寛文 8（1668）移転／現存（丸山）
西蔵坊→大沢山本龍寺／真宗	**市史 3-65 阿弥陀如来画像裏書写：文明 13（1481）尾張国葉栗郡本庄郷真嶋川野【河野門徒】了善，本願寺順如より画像拝領**～里：明応 6（1497）鵜沼に西蔵坊創建～里：永正 11（1514）犬山余坂小島里に移転，大門道という畠に道路跡～**市史 3-66 阿弥陀如来画像裏書：永正 11 本願寺（実）如より尾州丹羽郡犬山与坂村了西，画像拝領／同左：余坂～市史 3-69 粟津勝兵衛・同元辰連署奉書：本願寺門跡，江戸への途上で犬山に寄宿する旨，犬山惣坊主衆中に伝える～市史 3-159-38：慶長 7（1602）寺本喜左衛門屋敷の替地として寺内西蔵坊東面屋敷を与え，町諸役を免除【**このときまでに寺内町に移転**】～里：慶長 14（1609）本龍寺に改称～**市史 3-70 松尾左近某奉書：慶長 14（1609）本願寺，本龍寺の望みにより，木仏の本尊を許可／寛文 3（1668）②・天和元（1681）③：「本立寺」**
真蔵坊→無量山西蓮寺／真宗	寺伝：明応 2（1493）鵜沼宿に建立～寺伝：文亀元（1501）犬山北宿に移り，真蔵坊と号す【**北宿は現存地と同じか**】～里：文亀 3（1503）真蔵坊創建～**市史 3-64 阿弥陀如来画像裏書：文亀 3（1503）佐々木上宮寺門徒犬山郷北宿信慶，本願寺実如より画像拝領**～里：慶長 14（1609）改称／**寛文 3（1668）②・天和元（1681）③：「西蓮寺」**
城郭山円明寺／真宗	**市史 3-56 石灯籠刻銘：永和 3（1377）10・20**【**県内最古**】～里：大永 2（1522）浄念，三河上宮寺で修行後に創建／里：中切村～寺伝：慶長 7（1602）小笠原吉次より寄進【**このとき移転か**】～寺伝：慶長 11（1606）鵜飼町の神戸弥左衛門の寄進により本堂建設～**市史 3-58 顕如画像賛并裏書：慶長 11（1606）12・9 上宮寺門徒犬山浄念，本願寺教如より画像拝領**～里：元和 8（1622）改称／**寛文 8（1668）②，天和元（1681）③：「円明寺」**
心光坊→光明山浄誓寺／真宗	里：天文元（1532）乗阿，心光坊を創建／里：木ノ下村～**市史 3-63 教如画像賛并裏書：慶長 17（1612）本願寺教如より犬山心光坊の願主浄念に画像送る**～里：元和 5（1619）改号／**天和元（1681）③：「浄誓寺」**
妙立山本光寺／日蓮宗	里：文亀元（1501）創建，開山日長，里：妙海寺・妙国寺と大門口を共有／**天和元（1681）③：「本光寺」**
竜運山妙海寺／日蓮宗	里：文亀 2（1502）創建～**市史 3-55（妙海寺文書）長尾常閑黒印状写：天正 18（1590）長尾吉房，法花宗寺惣坊中に東西 40 間余南北 30 間余の熊野町の屋敷を寄進**【法花宗寺：本光寺・妙海寺・妙国寺】～長尾（三好）吉房の位牌あり【**吉房の菩提寺**】／**天和元（1681）③：「妙海寺」**
妙国寺／日蓮宗	里：寛文の頃まで住僧あり／里：本光寺と妙海寺の大門の間の町屋，**寛文 8（1668）②：敷地に 3 つの堂の描写，天和元（1681）③：門南脇に 1 箇所のみ「侍屋敷」【1668～1681 の間に廃寺となり，跡地が一時的に侍屋敷となる】**
藤井山願入寺／真宗	里：寛永 19（1642）創建，中之切の道場／**天和元（1681）③：「願入寺」**
徳授院→了義山徳授寺／臨済宗	里：文明 8（1476）創建，柏庭宗松開山【**木下城主と姻戚関係との説あり**】～寺伝：天正 12（1584）小牧・長久手合戦時に森武蔵守・池田勝入が塔頭を青塚砦に運び荒廃～**市史 3-81 武田清利判物：天正 15（1587）納所に徳授院を安堵～市史 3-83 石川光吉書状：文禄 4（1595）地子・竹木を免除～市史 3-84 小笠原吉次判物：慶長 7（1602）犬山之内の（屋敷）藪ともに寄進**～里：寛文 7（1667）改号／**正保 4（1647）①・寛文 3（1668）②：名古屋街道に接する「寺」**
金剛山祥雲寺／臨済宗	里：大永 6（1526）徳授寺境内に塔頭として祥雲庵創建【**徳授寺境内**】～里：小牧合戦時に陣取りされ荒廃～里：承応 2（1653）再建／**天和元（1681）③：西と南に土塁・堀**
神護山先聖寺／黄檗宗	寺伝：延宝 4（1676）創建／**天和元（1681）③：「熊野先聖寺」**～寺伝：正徳 5（1715）外町天神庵の地に移転／**寛政 3（1791）④：「先聖寺」**

西教（救）坊→日光山正久寺／真宗	**市史 3-87・88 宝筐印塔基礎刻銘：応永 13（1406）1・3，寛正 2（1461）4・21 銘あり**～里：天正年中（1573-1592）創建，伊木正久弟道鎮開基／里：下大本町～寺伝：慶長 18（1613）2 移転～里：寛永 13（1636）改号／現存
青海山薬師寺／真言宗	寺伝：天平 6（734）行基創建，里：本尊薬師如来を青海原（橋爪村の下の深瀬三昧付近）より拾う～**市史 3-85 小笠原吉次判物写：慶長 7（1602）犬山薬師寺宝光院屋敷 13 坊藪共に寄進**
専正寺・辻之御堂・二王嶋	里：熊野町東南に八町四方の寺あり，かいけん寺という
四谷山満蔵院／真言宗	里：犬山城水ノ手番所七回りに満蔵院という山伏居住。貴船社は満蔵院の鎮守～里：天文 6（1537）織田信康築城時に四ツ屋（寺内町竪筋）へ移転
大本町	里：昔，犬山の大通りで町人地であった。平岩親吉期に中切村の一部に町屋を移し坂下大本町とした。名古屋街道が庚申堂より下りていた（畠に形状残る）。成瀬正虎期に外町から羽黒大榎まで段の上に街道を付け替えた～**市史 3-159-3：寛永 5（1628）大本町龍雲寺屋敷**
上本町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。御供屋敷は元富川雲哲という医者の旧宅であるが，遠藤宗善（石川期の代官）宅はその隅にあり。西新町の瓦坂付近に宗善藪～**徳川林政「犬山神戸氏古記録写」：文禄 5（1596）神戸弥左衛門，犬山上本町の（柴山）佐右衛門に代わって湊役免除～市史 3-159-3：寛永 5（1628）上本町与平次**
中本町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。上・中本町の裏で大本町との境に一里塚の古木の榎あり。中切村への通路は中古のこと，小坂の下り口は龍雲寺境内で，大本町の人家を坂下へ移したときに開通。それまでは中切まで鵜飼町を通って迂回していた
下本町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。寛永 12（1635）の大火後に横道を開通。横道は武兵衛の屋敷跡で古土居残る。寛永の頃までは隣境に垣根を有していた
本町	**大吉御檀那帳（市史 3）：元和 6（1620）本町長次郎殿～同左：元和 8（1622）左衛門**
名栗町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。西名栗南側は八幡地内で御築地【総構】ができたときに切られた
鍛冶屋町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来～**大吉御檀那帳（市史 3）：慶長 14（1609）犬山之かぢ兼助宗七殿**
練屋町	里：天文の築城時に七人の町人が七軒町より移住，上之辻まで，昔は大手行当りまで錬屋町。横町は後に開通した町。松岡味安が居住。慶長 2（1597）創業の忍冬酒を製造する和泉屋小島家あり。犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来～**大吉御檀那帳（市史 3）：慶長 17（1612）ねりや町小嶋彦助殿～同左：元和 4（1618）ねりや町保々清次郎殿，梅村源次郎殿**
横町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。文禄以降に練屋町より延長して拓く
魚屋町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。昔，魚屋商人多し。枝町は天正の頃熊野町であったが寛文には魚屋町に【枝町は熊野町より北に延引】～**大吉御檀那帳（市史 3）：慶長 17（1612）うをや町**
熊野町	**市史 3-55 長尾常閑黒印状写：天正 18（1590）長尾吉房，法花宗寺惣坊中に東西 40 間余南北 30 間余の熊野町の屋敷を寄進**～里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。西側牢屋敷は名栗町庚申堂の辺より移転
寺内町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来～**市史 3-159-38：慶長 7（1602）寺本喜左衛門屋敷の替地として寺内西蔵坊東面屋敷を与え，町諸役を免除**

鵜飼屋・鵜飼町	里：犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。鵜飼町坂上の重松氏屋敷はもと平岩屋敷。神戸大海屋居所辺りが谷町で小坂の上が今町【崖下から上へ町が拡大】，材木商人の木場のあった材木町は鵜飼町に属す，野呂党七人の居住する七軒町を含む～**徳川林政「犬山神戸氏古記録写」：文禄 5（1596）神戸弥左衛門，犬山上本町の（柴山）佐右衛門に代わって湊役免除～市史 3-246「犬山神戸氏古記録写」所収文書：慶長 19（1614）12 犬山鵜飼屋神戸弥兵衛～大吉御檀那帳（市史 3）：元和 8（1622）鵜飼屋之角倉殿**
七軒町	里：針綱神社が城山にあったとき 7 人の町屋が存在していたことに由来。天文期の築城時に練屋町に移転，移転後も城内【三ノ丸】に七軒町の地名残る
外町	里：昔，産土神の正八幡宮が外町東側北堀近くに立地，西名栗町南側も八幡の一曲輪であった。犬山十二ヶ町の一つ。地子免許は豊臣秀勝が城主の時以来。慶長 4（1599）に八幡宮移転し，跡地が人家となる。成瀬正虎期に名古屋街道を八幡口に付替
北宿	里：木ノ下城の北宿が由来～**市史 3-64 阿弥陀如来画像裏書：文亀 3（1503）佐々木上宮寺門徒尾州丹羽郡犬山郷北宿の信慶，本願寺実如より画像拝領**
中切	**市史 3-159-39：文禄 2（1593）松岡味安に野呂屋敷を免除～市史 3-159-40：慶長 7（1602）犬山之内中切野呂屋敷を安堵**
猪子屋敷	里：徳授寺北裏の猪子屋敷は織田家臣の猪子郷左衛門・嘉助・才蔵等の屋敷跡。熊野町出先の馬場は家臣達の馬場跡
名古屋街道	里：名古屋街道は庚申堂より下りていた（畠に形状残る）が，成瀬正虎期に外町から羽黒大榎まで段の上に街道を付替。寛文 5（1665）9 月までは熊野町先馬場より入口の方が（東）本門であったが，下御長屋口【八幡口】が開通
小口街道	里：出来町の先の小口街道は秋葉社北であったが，享保 19（1734）11 に今の坂口に変更。坂口は古墓地
余坂・与坂村	里：稲木神社北裏は小嶋の里，大手東長屋居住の太田氏を移住させる～**市史 3-66 阿弥陀如来画像裏書：永正 11（1514）尾州丹羽郡犬山与坂村了西，本願寺（実）如より画像拝領**
内田村・内田渡	**吾妻鏡：承久 3（1221）6・5 承久の乱時に内田ノ渡に朝廷軍配置**～鵜沼記（『美濃国雑事記』市史 3）：古渡が内田渡～**市史 3-15 加藤光泰判物（瑞泉寺史料）：天正 12（1584）加藤泰景，内田渡船頭 8 人の田・畑・屋敷を船頭給として安堵～市史 3-27 伊奈忠次・彦坂光正連署判物（瑞泉寺史料）：慶長 14（1609）幕府，船頭給 23 石 7 斗 4 升 5 合再認，夜間通行も含め公用の渡船業務を犬山船頭に命じる～市史 3-28 鈴木重吉書状：市史 3-27 史料を犬山船頭に末代の御判として渡す**／里：元は内田門・堀近くにあったが，火災により現在地に移転。古い渡場は内田堤の古木の榎から畠中を通って新道へ上り，魚屋町の津田大門（東の新道の中程北側，亭主番所，津田與左衛門屋敷の大門口）の所に出る。松ノ丸から柳之御門の方への坂道が昔の内田村への通路

ゴシック体の記述は同時代史料による。明朝体の記述は地誌等の二次史料による。【　　】内は筆者の推定，補足。史料の略称・刊本は以下の通り。市史 3：犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1983。枝番号は本書の資料番号を示す。里：文化 14（1817）肥田信易著『犬山里語記』（犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1987），青龍山瑞泉寺記：貞享 3（1686）瑞泉寺塔頭龍済庵主仁渓慧寛著「雑話犬山旧事記」所収（犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1987），寺伝：犬山市仏教会『犬山市寺院録（犬山地区）』1983。

丸数字は以下の犬山城・城下絵図の番号と対応し，作成年を丸数字の前に付した。

正保 4（1647）①：尾張国犬山城絵図（徳川林政史研究所所蔵）

寛文 8（1668）②：犬山御城当分之絵図（犬山城白帝文庫所蔵）

天和元（1681）③：尾張国犬山城絵図（犬山城白帝文庫所蔵）

寛政 3（1791）④：犬山御城下之絵図（犬山城白帝文庫所蔵）

天保 10（1839）⑤：犬山町家絵図（犬山城白帝文庫所蔵）

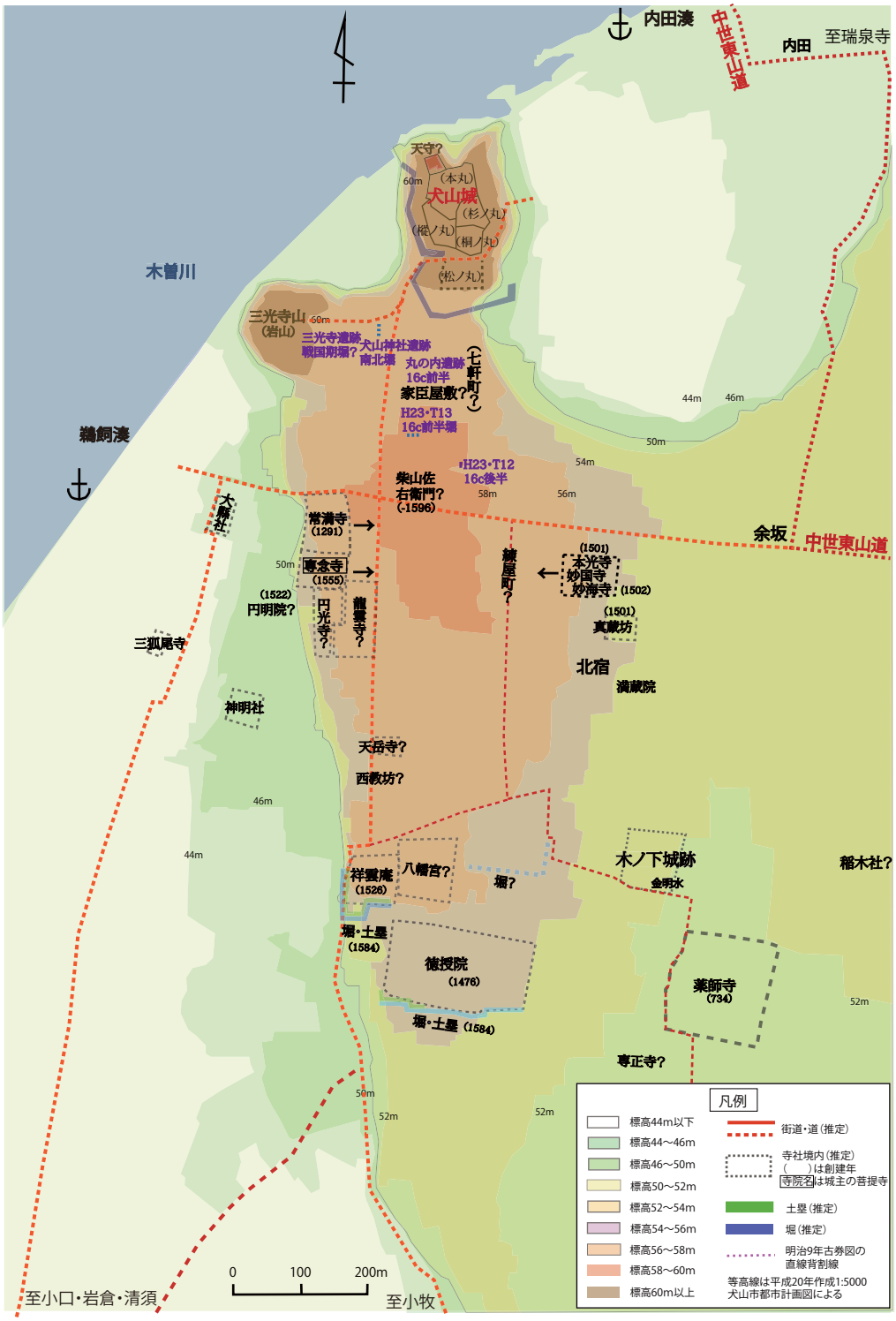

図１　戦国期（1537 年頃～ 1590 年）の犬山城下町

に，地域の信仰拠点である白山社の場所性を人心掌握に利用した可能性はないだろうか。木曽川左岸において珍しい独立丘陵の城山と三光寺山は，遠目にも目立つランドマークである。近世城下町図にも，城山の天守付近と三光寺山の岩山は強調されて描かれ続け，近世を通じて象徴的な風景であったことが知られる。古来以来，この岩山を一種の磐座とみなし，そこに宗教性・神聖性を見出す心性は，築城後も生きていたのではないだろうか。

犬山城本丸の現存天守のうち，下層2層の建築年代については，木材の加工痕の分析から室町末期まで遡る可能性が指摘されている（麓 2017）。この本丸を始め，杉ノ丸，樅ノ丸，桐ノ丸，松ノ丸のどの曲輪も，平坦面の累線に曲線が目立ち，人工的な直線部分は中央の大手道沿いと東側切岸側に限られる。その配置と方位も城山の尾根の向きとよく合致する。曲輪の基本形態は，戦国期に城山の地形に合わせて作られ，後に重要な部分を直線化したことをうかがわせる。高田（1994）は，戦国末期の天正10年から18年にかけての織田信雄の家臣中川定成期に，山腹の横堀・堀切によって，松ノ丸を含めた曲輪群が一体化されたと推定した。これをふまえると，形状は近世と異なるだろうが，戦国末期には既に城の曲輪群は存在したのではないだろうか。

犬山城の発掘調査によると，16世紀を通じて城山の遺物は皆無に等しく，遺物を消費する生活活動がほとんど行われず，一時的な詰城として利用されていたことが推測されている。その一方で，城山の南側の尾根中央部では，平成23年度調査の12トレンチで16世紀後半の遺物が出土し，13トレンチでは近世三の丸堀に先行する16世紀前半代の堀が検出された（犬山市教育委員会 2012）。過去の発掘調査においても，犬山城南の台地上で複数の地点から16世紀代の遺構・遺物が検出されたことから，城主の居館や有力家臣の武家屋敷と，それらを含めた正方位の地割が施工されていた可能性が高いと推定されている（鈴木 2017）。その指摘をふまえ，城山の南に犬山城に関連する居館群が立地する景観を想定したい。

2）内田湊と鵜飼湊

織田信雄が尾張国主であった天正12（1584）年から天正18年には，本城である清須城に対し，各地域の中心的城郭として複数の支城が設定された。各支城には支城主の知行地として，それを核とする支城領が形成された。中心地機能を高めた各支城の城下町においては，総構によって武士のみ，あるいは武士と商職人居住空間を囲う城下町が整備された（千田 1990）。犬山城の城主は，織田信雄の重臣である中川定成で，15000石が与えられた。支城の中でも犬山城は特に重視されていたことが推定される。この点をふまえれば，戦国末期までにその後の発展の基礎となる城下町が，犬山に成立していた可能性は高い。

犬山城から約1㎞東に離れた瑞泉寺との間に，木曽川の内田渡があった。内田渡は，承久の乱時に朝廷軍が配置された渡し場でもあり，京と鎌倉を結ぶ広域街道の中世東山道がこの地点を通過していたとみられる。内田渡は中世には瑞泉寺の支配を受けており，犬山城主とは独立した存在であったと考えられる。織田信長が炎上した瑞泉寺再建のために，瑞泉寺に対して材木

の河並諸役を免除した（市史 3―11）が，これは瑞泉寺と関連の深い内田が，単なる渡河点ではなく，木曽川の運材にたずさわる川湊であったことを示す。

内田渡と同様に川湊として推定されるのが，後の鵜飼町である。三光寺山にあった三狐尾寺の移転先は中切であるが，その位置は清須・岩倉方面に向かう街道沿いであった。この街道の延長上に位置するのが三光寺山であり，街道が三光寺山に向かう古道であることが推測される。この沿線に三狐尾寺が移転したのも偶然ではないだろう。この古道の突き当たりに立地するのが大縣社である。大縣社は来歴不明ながら，尾張国二宮である本宮山の大縣社と同名の神社であり，古墳の上に造営されたとされる古社である。その神主である野呂一族は，神社周辺に居住したと伝わる。その位置からすると，大縣社は三光寺山の遙拝所のような印象を受ける。鵜飼という地名は，木曽川を生業の舞台とする人々が集住する湊町であることを示唆する。この湊町が古くは三光寺，大縣社及び野呂氏と関連していたことを推定したい。近世以降にはこの付近に渡しや材木町があり，天和元（1681）年の「尾張国犬山城絵図」[7]によると材木蔵があった。中世の川船を操る人々が，そのまま渡船業や輸送業に従事したことをうかがわせる。

このように，南北に細長く延びる台地から下りた低地部には，犬山城を挟むように 2 つの川湊が存在したと推定される。

3）台地上の寺院と集落

それでは犬山城の立地する台地上には，何が存在したのだろうか。ここで寺社の分布パターンに注目すると，寺社は台地上の 3 地区に集中することが分かる。①常満寺・専念寺付近の台地西側崖線に沿う地区と，②本光寺・妙海寺・妙国寺周辺の台地東側の緩斜面地区，③大型寺社境内（徳授院・祥雲寺・八幡宮）の並ぶ南地区である。

①は鵜飼湊に隣接する。後の上本町の柴山佐右衛門は，豊臣期の城主石川光吉から湊運上として要求された上納金を納めなかったことにより湊役を罷免されたという。このことから，戦国期までの鵜飼湊が城主から独立した川湊であったこと，川湊の運材を差配する有力商人は戦国末までは台地上に居住していたことが推測される。台地上の集落と崖下の川湊とが連携し，犬山城主の権力から半ば独立した都市的集落が展開していたことが推定される。ここは，岩倉・清須･小牧方面から来た街道が段丘崖を登り，台地上に延伸した部分（後の大本町通）にあたる。この崖端の道に沿って鎌倉期より由緒を持つ古寺や城主の菩提寺が立地する点に注目したい。

②の東側緩斜面の寺院群のうちの本光寺･妙海寺･妙国寺は，合わせて法花宗寺惣坊と呼ばれ，一つの大門を共有していた。この周辺は近世に寺内町と呼ばれるが，それはこの法花宗寺の寺内に由来する地名なのだろう。法花宗寺の大門は西向きであり，その先にあるのが練屋町である。練屋町は犬山城築城時に，後の三の丸東側にあった白山社門前の七軒町の町人を移転させたことに始まるという。犬山最古の地籍図である明治 9（1876）年古券図[8]によると，練屋町の宅地割は奥行がまちまちで背割線が揃わず，その結果，隣接する全ての町との境界線もガタガタ

の不揃いとなっている。これは，犬山城下町全体の中では特異な地割パターンである。また練屋町は，町人地でありながら地割が相対的に大きく，町人地に一般的な短冊型地割とは異なる大型のブロック型地割が所々に目立つ。このような地割パターンは，練屋町の地割が他の隣接町に先行して形成された，古くからの町場であることを示唆する。法花宗寺の大門の向きからすると，法花寺と練屋町が無関係とは考えにくい。

法花宗寺近くの浄土真宗の真蔵坊は，文亀3（1503）年に本願寺実如より阿弥陀如来画像をもらうが，そのときの宛先は犬山郷北宿住人であった。このことから，真蔵坊が北宿に含まれることが推定される。北宿は木ノ下城の城下町に由来する地名とされる。真蔵坊から木ノ下城にかけて，木ノ下城以来の集落が存在した可能性もある。

③の南地区の2つの大型寺院の南辺には，天和元年図によると，堀と土塁が構築されていた。ここは現状でも明瞭に段差が残り，現地比定が可能である。この堀・土塁ラインは，台地上微高地の南限を封じる位置にあり，屈折を繰り返し，塁線を複雑にしている[9)]。天正12年に尾張国主の織田信雄が徳川家康と同盟を結んで豊臣秀吉と争った小牧・長久手の合戦時に，徳授院や祥雲庵は陣となり，その建造物も用材として利用され，一時的に荒廃したとされる。また，天正年間の羽黒川の合戦の際に，犬山方大将稲葉一鉄が，陣を「段ノ上」，すなわち台地上に置いたとされる。これらの陣に伴う構築物が台地南端の徳授院・祥雲庵の土塁・堀であったのではないか。南方の小牧山を本陣とする徳川方に向けた秀吉方の防衛ラインとして，天正12年前後に台地微高地の南限に土塁・堀が構築されたと考えたい。

以上より戦国期の犬山城下町は，白山社を移転させて築造された犬山城とその山麓に推定される家臣屋敷の他，内田湊，鵜飼湊，湊と連続する台地崖端の街道集落，台地東緩斜面の法花寺内と北宿，軍勢の駐屯地となることもあった南の大型境内群といった，成り立ちも機能も異なる複数の集落の集合体であったと推定される。その範囲は，崖下の川湊を除いて，台地上に南北に伸びる島状の微高地（54m等高線の内部）にほぼ限定される。

3　豊臣期城下町の形成と実態

1）豊臣期犬山城の位置づけ

図2は，天正18（1590）年から慶長5（1600）年の豊臣期犬山城下町の景観復原図である。天正18年の小田原征伐後の国替えによって，尾張一国は豊臣秀吉より甥の秀次に与えられた。秀次は秀吉の後継者として専ら京都で政務を執る立場にあり，尾張支配はその父の三好（長尾）吉房が代行した。政務は尾張の本城である清須城で行われたが，清須城主はあくまで豊臣秀次であり，三好吉房は犬山城主であった。尾張の国主代理を務める者の持ち城としての犬山城の位置づけはこの時に始まる。但し，実際には吉房は清須で政務を務めていたので，吉房二男で岐阜城主の豊臣秀勝が犬山を支配し，天正20（1592）からは三輪出羽守が城代を務めた。

豊臣秀次の尾張入府は，家康の関東移封に伴う，秀吉の対家康封鎖網形成と軌を一にする出

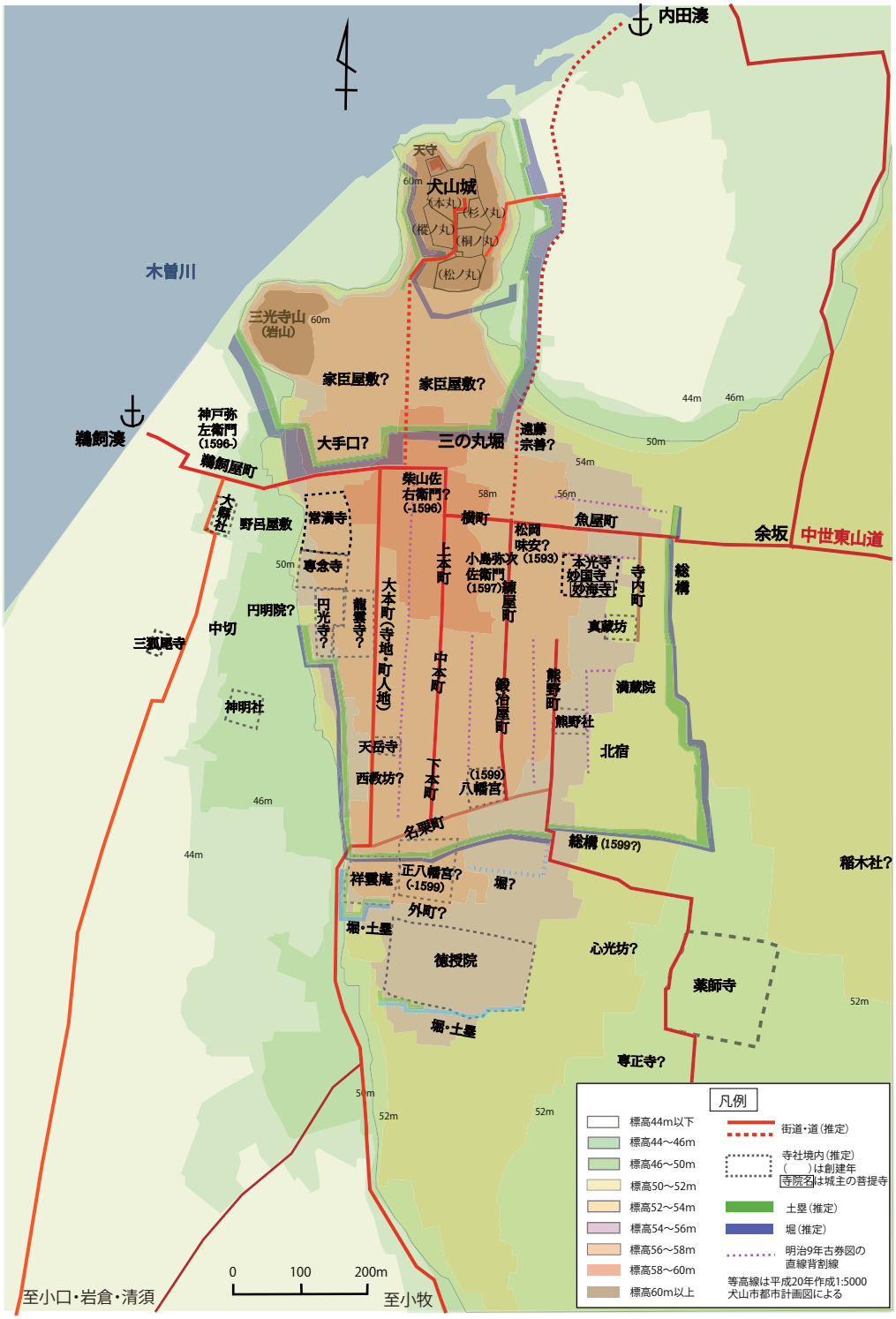

図２　豊臣期（1590 年～ 1600 年）の犬山城下町

来事であった。対家康封鎖網の形成とは，天正18年に秀吉家臣がそろって東海道沿いの主要城郭（岡崎，吉田，浜松，掛川，駿府）に配されたことである。これを契機に，高石垣や天守を備えた織豊系城郭への改修や，天守へのヴィスタを意識した街道や大手門の設定，城下町全体を囲う総構の構築など城下町プランの改造がなされる場合もあった。この時の各城の石高は，掛川（近江長浜より山内一豊入封）68000石，岡崎（田中吉政新封）85000石，浜松（近江佐和山より堀尾吉晴入封）12万石，駿府（近江水口より中村一氏入封）14万石，吉田（美濃岐阜より池田照政入封）152000石であった。このときの犬山城の石高は10万石であり，東海道沿いの豊臣城郭に匹敵する石高であったことが分かる。犬山城は，東海道沿線にはなく，尾張国主の代理者の持ち城ではあるが，石高の高さからすると，豊臣期の東海道沿い諸城と同等に城下町の改修がなされた可能性がある。

文禄4（1595）年の秀次失脚後，犬山城は秀吉直轄となり，石川光吉が12000石で入城した。石川光吉は天正18年以来，木曽代官を務めており，秀吉の奉行として木曽材の運搬を取り仕切っていた。石川光吉に与えられた石高は，それ以前の三好吉房期と比べると，大幅に減少した。それは，このときの犬山城が，尾張第二の地域支配の拠点ではなく，木曽川水運の一元支配を目的とした城へと変化したことによるものだろう。このように10年間の豊臣期の中でも，前半の5年間と後半の5年間とでは，犬山城に与えられた役割・意義が異なる。

2)「竪町型」町割とメインストリート，ヴィスタ

最初に城下町の町割について検討したい。先に明治9年古券図における地割形態より，練屋町が周囲よりも成立が古く，戦国期に遡ることを推定した。石川光吉期の慶長2（1597）年には，小島弥次左衛門が練屋町に移って酒造を開始したとされる。三好吉房の城代であった三輪氏から文禄2（1593）年に諸役免除を得た松岡味安も，練屋町東側に居住したとされる。また，文禄・慶長前半期の町総代と思われる遠藤宗善の屋敷も，西新町瓦坂近くの宗善藪付近にあったとされ，練屋町通には豊臣期の城主から特権を得た複数の有力町人の屋敷が推定される。古券図によると犬山城下町の町人地の中で，練屋町のみに武家屋敷と同様のブロック型地割が目立つが，これは豊臣期に有力町人の大型屋敷が集中したことによるものだろう。

練屋町と隣接する町割は，豊臣期か，それ以降に形成されたと推定される。ここで練屋町とその西隣にある上本町の地割の奥行きに注目したい。上本町の奥行きは練屋町より少し短いとはいえ，ほぼ同じ長さの奥行きである。奥行きの深さからすると，上本町の地割形成と練屋町のそれとの間にはそれほどタイムラグがなかったと考えられる。上本町は両側町なので，練屋町と接する側（本町通の東側）の地割と同時に，通りを挟んだ向かい側の地割（本町通の西側）も形成されたのだろう。上本町西側の短冊型地割の背割線は直線で揃っており，計画的に背割線が敷設されたことがうかがえる。しかもその背割線は中本町，下本町とも連続しており，本町通沿線の都市化が自然発生的なものではなく，人為的な計画に基づくものであることが示唆

される。本町通自体が，戦国期以来の古道である大本町通と練屋町通の間を二分する位置を選んで，南北直線道として敷設されたのではないだろうか。このように考えると，本町通の設定とその沿道の町の形成は，練屋町の成立からそれほど遠くない時期に進んだことが推定される。さらに古券図によると，本町と同じように直線の背割線で町堺が区切られた町として，魚屋町，鍛冶屋町，熊野町がある。これら 3 町の背割線設定も，本町沿道の計画的都市化と同時期ないしそれ以降であろう。

一方，古券図において町堺の背割線が揃わず，奥行きも短く，周囲の町に比べて劣勢な町が寺内町と横町，名栗町である。これらの町の都市化は，周囲に比べて遅かったと推測される。このように城下町における各町は，練屋町→本町・魚屋町・鍛冶屋町・熊野町→寺内町・横町・名栗町の順に成立し，その間には若干のタイムラグがあると考えられる。三好吉房の城代であった豊臣秀勝期に 12 ヶ町が地子免除特権を得たとされ，それに従えば，寺内町，横町，名栗町に至るまで，先に挙げた町は全て豊臣期には町場化していたことになる。以上より，この 4 列の平行する「竪町」街路と町割を 12 ヶ町が特権を得たとされる三好吉房期に推定したい。

ここで留意したいのが，本町とよく似た名称の大本町である。大本町は中世古道の延長上にあり，平岩親吉期に坂下に町人を下ろすまで犬山の中心的町場であったとされる。この道に沿って常満寺，専念寺，円光寺，龍雲寺などの中世寺院が並ぶことも，この道が中世まで遡ることを窺わせる。大本町通沿道には，復原図で示した寺院以外にも，西願坊，十王堂，観音堂，庚申堂，大本院等の数多くの寺院が存在したとされる。しかし，地子免除特権を得たとされる 12 ヶ町の中に大本町の名前がない。ここから，大本町は実態としては，寺院境内が大きな面積を占める門前集落であり，豊臣期における中心的町場ではなかった可能性がある。大本町の町人を移転させた坂下大本町が，崖上の大本町の長さに比してあまりに短く小規模であることも，大本町に実際にはそれほど多くの町人が集住していなかったためではないだろうか。

以上より，豊臣期犬山城下町には，城郭に向かって垂直方向の街路が 4 本通る「竪町型」の形態が成立していたと推定される。「竪町型」城下町の歴史的意義を再検討した中西（2013）は，秀吉や秀吉系大名の城下町における町割は「竪町型」が基本であるとする。城郭を中心とする求心性が強く現れる「竪町型」プランは，不安定な政情下において領国経営の絶対的な拠点を築く必要性から採用されるとする。「竪町型」となった豊臣期犬山城下町は，秀吉系城下町の典型的な形態であるといえよう。

しかし，犬山の「竪町型」町割は，複数の南北道のうち，どの通りが都市の中心軸であるのか不明瞭である。町の成立時期や有力商人の集住からすると町場の中心は練屋町であるが，直線の背割線を持つ都市計画の存在や名称からは本町であり，成立時期の古さと広域街道との連続という点からは大本町である。つまり，形態は「竪町型」にみえるが，城郭を中心とした求心構造を高めるという「竪町型」町割の本来の機能は伴っておらず，不十分な「竪町型」城下町であったといえよう。

また，この「竪町型」町割は，豊臣期に新規に構築されたものではなく，戦国期以来の寺社・街路・町の分布パターンの延長上にあった点にも留意したい。戦国期犬山城下町には，既に大本町と練屋町の2本の南北街路が存在したと推定され，豊臣期の「竪町型」への改造は，その中央に本町通を，鍛冶屋町の東に熊野町通を新設するだけで可能であった。その点では，豊臣期城下町建設における戦国城下町との妥協の産物としての，内実を伴わない「竪町型」の形態であったとも評価できる。

城郭と城下町の町割との関連を検討したい。犬山城の現状の縄張りは，文禄・慶長期の連続枡型虎口を備えた織豊系城郭として評価されている（千田 2017）。また，発掘調査によると，犬山城から出土した瓦は，天正後半から慶長期まで遡るとされる（鈴木 2017）。少なくとも豊臣期に瓦葺きの建造物があったことが分かる。ここで，城下町側のどの場所から天守を見通すことができるのかを，復原図上で想定してみる。天守は，中世以来の城下町の大通りであったとされる大本町通の延長上にない。近世の主軸道である本町通（上本町―中本町―下本町）の延長上にもない。どちらの町通りに立っても，その正面に天守は見えない。

宮本（2005）は，権力の所在を視覚的に表明するために，豊臣政権の城下町では，城下のメインストリートから天守を見通す「タテ町型ヴィスタ」が設定されたと主張した。豊臣政権の城下町の一つである犬山城下町の場合，城下町に「竪町型」町割が施工されたにも関わらず，天守へのヴィスタはそれに連動していない。天守と城下町の町割が完全に一体のものとはなっていない点も，豊臣期城下町としての不完全さを示している。

3）総構の構築と三ノ丸堀

城下町の総構について，構築時期を検討しよう。南側の総構に注目したい。その一部の遺構が現在も愛宕神社の境内北に残るが，これは近世に愛宕山長泉寺延命院の境内に取り込まれたために残ったものである。延命院は慶長10（1605）年12月に，長泉坊が当時の城主小笠原吉次より「愛宕屋敷藪共」を寄進され，町次諸役免除の特権を得て，この境内を確保した。慶長10年に延命院の境内敷地を確定する時点で既に，その北限となる場所に「藪」，すなわち総構の堀と土塁が存在した可能性がある。

次に正八幡宮に注目する。往古の正八幡宮は後の外町東側に立地し，西名栗町南側も八幡の一曲輪であったとの伝承をふまえて位置比定すると，図2にみるように，その境内は後の総構をまたぐ範囲に推定される。正八幡宮は慶長4（1599）年に総構北側の名栗町に移転したとされ，そこに慶長12（1607）年に白山社（針綱神社）が移転してきたことで，二社が合祀・併存された。慶長4年に正八幡宮が旧地から移転した理由は，位置からみて総構を構築すること以外に考えにくい。この点と延命院創建時の「藪」の存在から，少なくとも総構の南辺は，慶長4（1599）から同10（1605）年までの間に構築されたことが分かる。さらに踏み込めば，総構の構築時期は，正八幡宮の移転年である1599年を想定できる。それは豊臣期後半の石川光吉城主期の末年に相

当し，町割の施工後にあたる。ここから，犬山城下町の大きな特徴である「竪町型」町割と総構が，首尾一貫した一つの都市計画によるものでないことが分かる。

ここで総構ラインを，「竪町」の施工範囲である台地上の微高地（標高 54m 以上）と対照させると，厳密には合致しない。特に南辺は，既に存在する小牧・長久手合戦時の土塁・堀を組み込むこともせず，微高地の尾根を分断し，南東部（北宿）まで大きく張り出すラインが選択されている。このラインが選択された理由としては，一つは中世以来の主要道であった台地崖下から大本町へ上る坂の登坂地点を，城下町の出入口として取り込む意図が想定される。また，南東部の北宿を取り込んだのは，既に微高地上の大半が「竪町型」の町割によって占有されているため，家臣に与える武家地として，木ノ下城時代に一度開発された土地の再活用を試みたのだろうか。

注目したいのが，総構南辺における虎口の形状である。正保 4 年図に見られる枡型虎口（八幡口）は，後述のように名古屋街道を付け替えた 17 世紀半ばの成瀬正虎期に建設されたものであろう。それでは，名古屋街道の付け替え以前の虎口はどこなのだろうか。一つは，旧来の街道のルートにあたる台地から崖下への登坂地点付近であろう。もう一つは，成瀬期の八幡口とは異なる単純な食い違いの虎口である薬師口を想定したい。薬師口は，薬師寺方面からの旧道の取り付き地点で，寛文 5（1665）年以前の本門とされることも傍証となる。

総構に薬師口と同じ形状の食い違い虎口を他に探すと，北東の余坂口も同様の形状であることが分かる。この虎口も総構築造初期から設定されたものと推定される。とすれば，東側の総構も南辺と同時期に構築されたのだろう。一方，西側には，正保 4 年図においても総構が南半分しかない。そもそもここは高低差のある段丘崖であるので，軍事を意図したとしても，特に総構を巡らせる必要性は乏しい。地子免許となった 12 ヶ町の中で，唯一，台地上ではなく崖下に立地する町が鵜飼町であることから，鵜飼町は城下町の一部と認識されており，その間を隔離する西側総構の北半分は必要なかったのだろう。

総構と三ノ丸堀との関係を検討したい。正保 4 年図によると，大手口は幅の太い堀の中に浮かぶ 2 つの空間が連続する複雑な形式となっている。城郭側（北側）の空間は四面が石垣であり，石垣のない城下町側（南側）と明確に異なる。この石垣の空間の形状は，総構の外枡型虎口（八幡口）とよく似ており，同じ成瀬正虎期の増築であることを推定させる。とすれば，それ以前から存在したのは城下町側の石垣のない空間ということになろう。

ここで，正保 4 年図の三の丸堀の土塁の形状に着目する。三の丸堀はその中に枡型の「島」が浮かぶために幅が一定せず，複雑な形状をしているが，それに比べて内側の土塁の形態は単調である。土塁の形状で特徴的なのは，西側が南に向かって張り出している点である。その理由としては，中世以来のメインストリートであった大本町通が西側に取り付くからということ以外に考えにくい。これらをふまえると，図 2 に示したような古い段階の大手道と大手口を推定できよう。問題はこれらの構築時期であるが，三ノ丸堀が武家地と町人地を明瞭に区分する

点から考えて，「竪町」の町割の施工と近い時期ではないかと推測される。但し，この点については，考察材料が少ないため，今後の発掘調査の成果を待ちたい。

4）城下町と湊町の一体化

木曽谷の材木流送は中世から行われていたが，その中継港が木曽川対岸の鵜沼から近世には犬山へと拠点が移る。このときの犬山湊が鵜飼町である。文禄5（1596）年に石川光吉はそれまで犬山湊役を務めてきた上本町の柴山佐右衛門を罷免し，代わって神戸弥左衛門を置いた。神戸弥左衛門は犬山湊の川番所の預かり支配の指名を受けており，神戸屋敷のある鵜飼町は犬山城の公的な川湊となった。石川光吉は鵜飼湊の支配を，神戸氏を通じて進めたといえよう。

中世までの崖下一帯における有力者は，先述のように大縣社神官の野呂氏と推定される。元文5年写の「犬山城郭絵図」[10] にみるように，近世になっても大縣社の東に広大な「野呂屋敷」があった。しかし文禄2（1593）年には，練屋町の商人松岡味安が城主三輪氏より野呂屋敷を免除されて（市史3-159-39）おり，既にその屋敷は台地上の特権有力商人に所有されていたことが分かる。豊臣前期までに城下町側の有力商人が川湊へ進出していることがうかがえる。以上のように，豊臣期，とりわけ石川光吉期に中世的な湊を支配する権益が大きく変更され，台地上の「竪町型」城下町と並んで，川湊の機能を保護・強化された鵜飼町が発展したと推定される。その結果，戦国期より鵜飼町は台地上の集落と連続していたが，両者は更に一体化したと考えられる。しかし，鵜飼町に台地上の「竪町型」の町割が敷衍されることはなかった。その結果，地形条件も形態も異なる城下町と川湊集落が台地崖線をまたいで連続することとなった。

豊臣期に推定される犬山城下町の建設事業をまとめておこう。豊臣前期の三好吉房期に，台地上の微地形と戦国城下町の街路を活かして，4列の長方形街区から成る「竪町型」町割が施工された。このとき，武家地と町人地とを区分する三ノ丸堀も建設された可能性がある。豊臣後期の石川光吉期には，鵜飼湊の振興と管理強化が進められるとともに，城下町を囲郭する総構が構築された。これらの豊臣期における犬山城下町の形成は画期的なものであったが，同時期に一体の計画の下で施工された事業ではない。しかも，「竪町」から天守へのヴィスタが明確には設定されていないという点では，城郭と城下町が完全に一体化したとは言い難い。なお，犬山城の天守は，城下町側の町通りから直線で見通すことはできないが，その北側を流れる木曽川の水面からは遠方からも良く見え，川船からの視線を意識しているかのような印象を受ける。木曽川水運と川湊を重視する政策が，城郭に何らかの影響を及ぼしたとすれば興味深い。

4 「総郭・竪町型」城下町の完成

1） 小笠原吉次と平岩親吉による城下町修正

図3は，慶長5（1600）年から元和3（1617）年までの景観復原図である。慶長5年の関ヶ原の戦いによって，石川光吉は犬山城から去ることになった。関ヶ原の戦い以降，尾張国主となっ

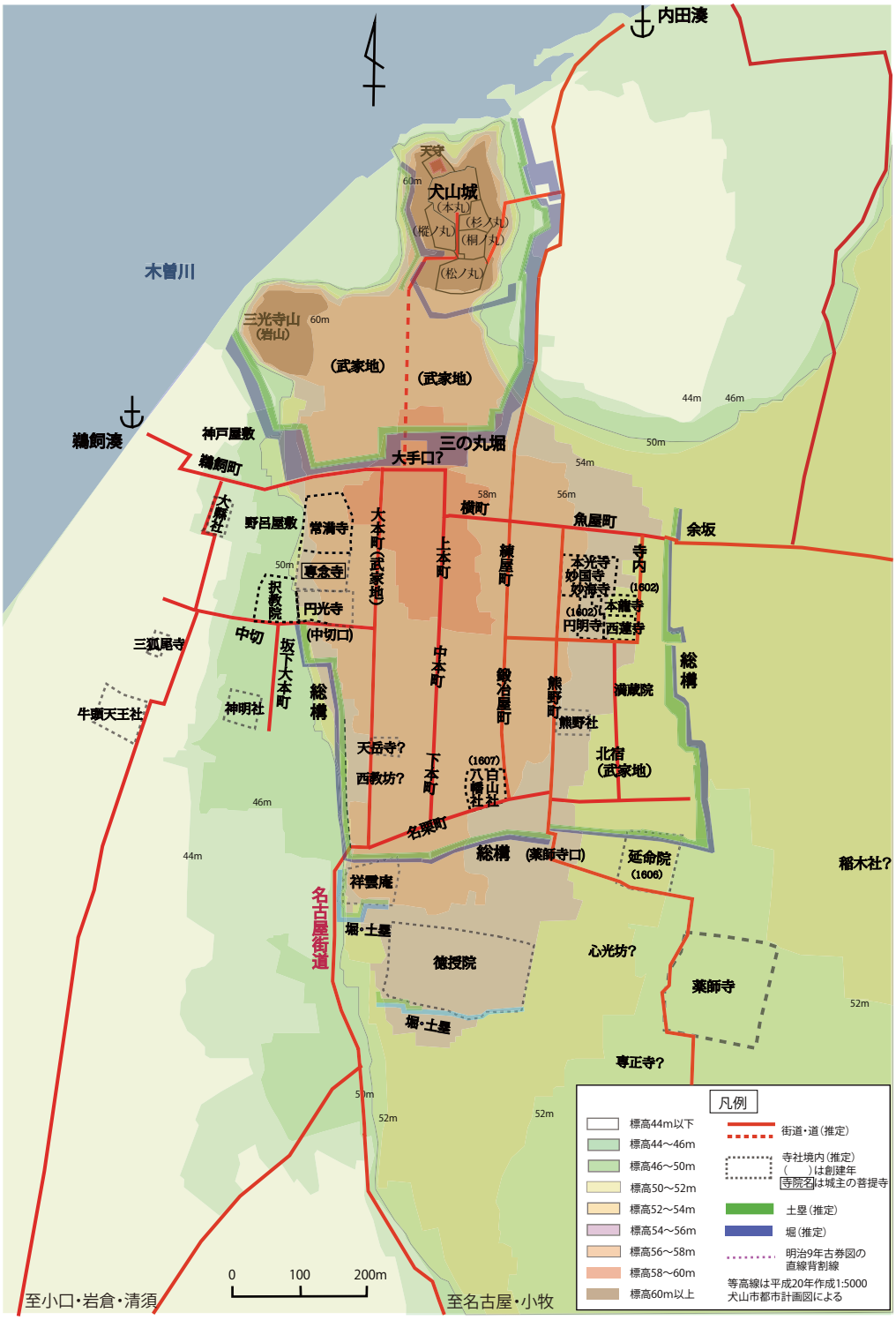

図 3　小笠原吉次・平岩親吉期（1600 年～ 1617 年）の犬山城下町

たのは，徳川家康の四男松平忠吉であり，この時から尾張は，豊臣方の拠点のある大坂や豊臣恩顧の大名の根強い西国に対する徳川方の前線として重視されるようになった。最初に犬山城主となったのが，松平忠吉の筆頭家老である小笠原吉次である。尾張国主の政務代行者の持ち城としての犬山城という位置づけは，小笠原期も豊臣前期と共通しており，尾張における犬山城の役割は継承された。

小笠原期の犬山城下町に，豊臣期からの変化はあまり見出せない。変化としては，法花宗寺と真蔵坊の周囲に寺院が増え，寺内町の街区が寺でほぼ埋まった点と，総構の南に接して延命院ができた点のみである。小笠原吉次は寺町の拡充を行った以外は，豊臣期城下町をそのまま継承したといえよう。

慶長12（1607）年の松平忠吉の死によって，尾張国は家康の九男・義直に与えられた。義直はまだ幼少であったため，その傅役であった平岩親吉が義直に代わって尾張支配を執行することになった。平岩親吉は，それ以前の任国の甲斐甲府より尾張に入封し，小笠原吉次や石川光吉とは別格の123000石を与えられた。犬山城は小笠原氏に代わって平岩氏に与えられたが，親吉自身は国務の執行のため清須城に居城し，犬山城には城代を置いた。本来の国主である徳川義直が成人するまでの支配代行者が平岩親吉であり，その平岩の持ち城として犬山城が位置づけられた点は，豊臣前期や小笠原吉次期と変わらない。しかし，平岩には大名並みの石高が付与され，前任地の甲府から連れてきた家臣の数も増えたことだろう。それに伴って，犬山城下町にもこれまで以上の武家地が必要とされたことが想定される。

大本町通は，昔，犬山の大通りで町人地であったが，平岩親吉期に中切村の一部に町屋を移し坂下大本町としたという。その跡地は，武家地とされた。平岩親吉の尾張入部に伴い，甲府より連れてきた家臣が増加し，清須と犬山では家臣屋敷建設のための用地確保が従来の武家地以上に必要となったことが推定される。犬山における大本町の武家地化は，小笠原期までの武家地（三の丸，北宿）だけでは武家地が不足したことによる措置だろう。

それでは，大通りであった大本町の町人地を移転させるという強硬手段に出てまで，台地上に武家地を確保したのはなぜだろうか。一つは，既に総構と三の丸堀によって城下町は周囲を囲まれ，その内側は町人地と武家地でほぼ埋まっており，総構内にまとまった空閑地を取れなかったという物理的制約によるものであろう。逆に大本町の武家地化は，平岩期までに既に総構が存在していたことの傍証になる。もう一つは，大本町を武家地とすることで，寺院と町との結びつきを断ち，純粋な町人地としての坂下大本町と武家地としての大本町に機能を明確に分離させたのではないだろうか。段丘崖下の坂下大本町への町人地の移転には，大本町から崖下への道路開設が必要となる。それ以前に存在した円光寺や龍雲寺の寺地を割いて，中切への通路（中切口）が開設されたのは平岩期であろう。

しかし，この政策によって，豊臣期城下町では曖昧であった城下町の中軸道路が，本町通一本に定まったのかどうかはよく分からない。ここで，かつて城山にあり，東宮山に移転させら

れた白山社（針綱神社）が，平岩親吉の入城と同年に総構内に戻された点に注目したい。先述の通り，白山社は中世以来，丹羽郡における信仰拠点の一つと推定され，犬山の産土神であった。白山社を城下町内に戻したのは，白山社が持つ地域信仰の求心力を，城下町の経営に利用することを企図したためではないだろうか。しかしその場所が，総構築造に際して移動させられた八幡社の境内で，練屋町の南北道路の南の終点であることは，この段階では練屋町通がまだなお中心軸として認識されていたことを推定させる。

2） 成瀬期における「総郭型」「竪町型」城下町の完成

慶長15年に徳川家康より尾張藩の付家老となるよう命じられた成瀬正成は，元和3（1617）年に将軍秀忠より犬山城を拝領し，翌年犬山城に入城した。正成を初代とする犬山藩主成瀬家は幕末まで続き，近世を通じて犬山城主は成瀬家であった。図4は，元和3年以降の17世紀の成瀬期における景観復原図である。

二代藩主の正虎の時（1625-1659）に，本丸から山麓の松ノ丸に御殿が移されたとされる。正保4年図では，三ノ丸の周囲は土塁と塀で囲まれるが，三代藩主の正親期（1659-1703）にあたる寛文5（1665）年の「犬山城絵図」[11] になると，三ノ丸は松ノ丸に名称が変更され，敷地も東に拡張し，その名の通り，曲輪内と周囲の土塁上に松が植えられる。寛文8（1668）年図では，松ノ丸周囲の土塁外側が総石垣とされ，さらに整備が進んだ様子を見て取れる。これらの松ノ丸整備によって，大手口側から北を見通すと，松ノ丸御殿が正面に見え，その後方左手に天守が建つ城郭景観となったと考えられる。

ここで注目したいのが，二代正虎の時に名古屋街道が新たに開通し，段の上，すなわち台地上を通るようになったとする『犬山里語記』の記述である。それまでの犬山城から名古屋方面への街道は，城下西端の大本町通から段丘崖下へ下りて南下していたが，これを城下町の本町通から総構を貫通して直線で南下するよう，街道の付け替えを行ったという。正保4年図では，本町通が総構を通過する八幡口に外枡虎口が築造されていた。この八幡口と共通する形状の外枡虎口が，三ノ丸堀の大手口にも見られる。大手口は三ノ丸堀の中に2つの島状の枡型が連続する形状をしているが，このうち北側（城側）の総石垣の枡型の方が新しいと推定される。八幡口の外枡虎口と形態が似ていることから，これら2つの虎口は名古屋街道の付け替えと同時期に建造されたものと推測される。

これら2つの虎口は，本町通の直線道によって結ばれ，さらに大手口を超えて直線道は松ノ丸に向かう。松ノ丸を西に迂回して城郭に入った後，再び大手道は直線道となり，本丸天守を目指す。つまり，三代正親の寛文年間には，本丸―大手道―松ノ丸御殿―三ノ丸大手道―大手口―本町通―八幡口―名古屋街道が，直線で一線に並んだことになる。この直線ラインの先は天守ではなく，御殿である点に留意したい。既に天守へのヴィスタに意義を持たせる時代は過ぎ，御殿の重要性が強く認識されるようになったためであろう。このように，正親による犬山城に

図４　成瀬初期（1617 年～ 17 世紀末）の犬山城下町

おける松ノ丸御殿を中心とした城郭整備は，先代正虎が行った主街道の付け替えや大手口・八幡口の改修といった城下町改造を受けて，その総仕上げとして行ったものと考えられる。

主街道の付け替えによる本町通のメインストリート化は，練屋町通から主軸道路が変更され，城下町の中心が本町に特定されたことを意味する。こうして，複数の「竪町」街路が併存し，どれが主軸道か不明瞭であった豊臣期から，17 世紀半ばになってようやく，主軸道は本町通に限定された。この段階で，名古屋街道―主軸街路―大手口―城郭御殿が一線にタテに並ぶ「竪町型」城下町が，形態のみならず機能としても完成したと考える。

しかし全国的に近世においては，城下町に街道を取り込んで大手に交差させ，街道を中心に町割を行う「横町型」が主流となる（中西 2003）。それでは，「竪町型」が時代遅れとなった 17 世紀半ばという時期になって，なぜ成瀬氏は旧型の「竪町型」城下町として犬山を完成させたのだろうか。慶長 15（1610）年に清須に代わって新たに尾張の首都となった名古屋は，城郭の大手口から，城郭に対して垂直方向にメインストリートの本町通が南進し，外港である熱田と東海道に至るよう設計された，見事なまでの「竪町型」城下町であった。成瀬氏の目指した城下町プランは，尾張藩の本城の名古屋であるのかも知れない。

一方で，17 世紀半ばに至っても，正保 4 年図にみるように，総構は城下町を完全には囲んではいなかった。成瀬氏が総構に関心がなかった訳ではない。城郭整備事業と同時期の寛文 4（1664）年には，町裏の総構の一部を修築し，同 4 ～ 5 年にかけて総構の出入口に木戸を作ったとされる。それでも，寛文 8 年図でも天和元（1681）年図でも，東側と西側の総構ラインは，北の段丘崖ないし三ノ丸堀まで達していない。

犬山城下町図は天和元年図以降，18 世紀半ばまで現存例がなく，長い空白期となる（山村 2017）。元文 5（1740）年にようやく城下町絵図がみられるようになるが，その「犬山城郭絵図」[12] によると，総構が城下町を一周めぐっている。「総郭型」城下町が完成したのは，1681 年から 1740 年の間ということになる。大規模城下町である名古屋は，総構を持たない。近世中期になってから，成瀬氏が総構を完成させることにこだわった理由は，自らを将軍の直臣である付家老として位置づける成瀬氏のアイデンティティの現れと推定するのは，読み過ぎであろうか。

「総郭・竪町型」の犬山城下町は，以上のようなプロセスを経て，近世中期に完成したものと考える。

（京都大学大学院人間・環境学研究科）

付記　本稿は，犬山城城郭調査委員会委員として，犬山城下町の構造に関する歴史地理学的調査を行った研究成果の一部である。犬山市教育委員会編集･発行の『犬山城総合調査報告書』（2017 年刊行予定）の中で「城郭・城下町の空間構造」として執筆した論考を，全面的に改稿した。本稿の内容は，平成 29（2017）年 1 月 22 日に犬山国際観光センター（フロイデ）で開催され

た「犬山城シンポジウム―「城郭」の歴史的価値を考える―」（犬山市教育委員会主催）において発表した。

注

1）犬山城下町の個別の町・寺社に関する史料や来歴等は，犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編（1997）に一部紹介されているが，全ての景観構成要素を悉皆的に記述するものではなく，城下町全体の空間構造について論じるものではない。川島（2014）は，木ノ下城期，犬山城築城期，17 世紀初頭に分けて城下町の変遷図を提示する点で初の試みとして評価されるが，街路や寺社，町，武家地，堀・土塁等の具体的な位置・形態までは地図化しておらず，一部の施設・機能の分布の傾向を示すに留まる。

2）徳川林政史研究所所蔵（図物甲 218）。正保城絵図の控図である。以下，正保 4 年図と略す。画像は名古屋市博物館編（2000）や犬山城白帝文庫歴史文化館編（2006，2014）に掲載される。本文中で正保 4 年図を元に論証するときは，図 4 を参照されたい。

3）戦国期から近世初期にかけての史料は，犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編（1982・1983）に掲載されている。本文及び表 1 の分析にこれらの史料を用いる場合は，市史史料編の巻号並びに史料番号を記した。例えば，市史 3―44 は『犬山市史　史料編 3』における 44 号史料を指す。

4）文化 14（1817）年肥田信易著。犬山市教育委員会編（1982）に所収される。

5）犬山城図及び城下絵図は，数多く伝存することは知られていたものの，所在確認を含めて，これまで悉皆調査はなされてこなかった。そこで平成 23 ～ 27 年度に，犬山城総合調査の一環として，著者を中心に，絵図原本の悉皆調査を行い，管見の限り，全 56 枚の絵図が存在することを確認した。それらについて書誌情報を調査し，描写の相互比較を行って，絵図の系譜を明らかにした。その結果，犬山城下町の空間構造を論じる上で有用な絵図は，前掲注 2）の正保 4 年図を含めた数点に絞られることが判明した（山村 2017）。本稿と表 1 でも，その主要絵図を用いて論証している。

6）本稿における犬山城の城主やその時期，政治背景については，白水（2017 予定）と犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編（1997）に基づく。

7）犬山城白帝文庫蔵（60　2070）。以下，天和元年図と略す。画像は犬山城白帝文庫歴史文化館（2006）に掲載される。

8）犬山市役所蔵。

9）天和元年図以降にこの付近に描写される足軽屋敷（下長屋）は，徳授院・祥雲寺南辺の堀・土塁と平行する方位に延びる。明治 9 年の古券図によると，この足軽屋敷の細長い地割に接続するように，南北の堀跡が推定される。17 世紀後半に足軽屋敷が建設される前には，ここにも堀があったのではないだろうかと考え，図 1 に記入した。

10）犬山市文化史料館蔵（市史史料目録 113）。大型複製図が，犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編（1979）に掲載される。

11）犬山城白帝文庫蔵（60　2005-1 ～ 2）。以下，寛文 5 年図と略す。画像は犬山城白帝文庫歴史文化館（2006，2014）に掲載される。

12）前掲注 10）。

文献

矢守一彦 1970.『都市プランの研究』大明堂 .

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1979.『犬山市史　史料編 1　近世絵図集』犬山市 .

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1982.『犬山市史　史料編 4　近世上』犬山市 .

犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1983.『犬山市史　史料編 3　考古　古代・中世』犬山市 .
矢守一彦 1988.『城下町のかたち』筑摩書房 .
千田嘉博 1990. 尾張国における織豊期城下町網の構造 . 村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社 , 233-279.
高田徹 1994. 縄張りからみた尾張犬山城の検討 . 郷土文化 49（1）.9-20.
犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編 1997.『犬山市史　通史編 上（原始・古代　中世　近世）』犬山市 .
名古屋市博物館編 2000.『尾張徳川家の絵図―大名がいだいた世界観―』名古屋市博物館 .
中西和子 2003. 織豊期城下町にみる町割プランの変容―タテ町型からヨコ町型への変化について―. 歴史地理学 45（2）. 25-45.
宮本雅明 2005. 豊臣政権の空間設計と都市造形 .『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版 . 454-480.
犬山城白帝文庫歴史文化館編 2006.『犬山城　城をめぐる歴史と天守創建の謎を探る』犬山城白帝文庫 .
横山住雄 2012.『織田信長の尾張時代』戎光祥出版 .
犬山市教育委員会編 2012.『犬山城範囲確認調査　第 3 次調査概要』犬山市教育委員会 .
川島誠次 2014. 尾張犬山 . 新・清須会議実行委員会編．守護所シンポジウム@清須　新・清須会議資料集 , 169-176.
犬山城白帝文庫歴史文化館編 2014.『図説　犬山城』犬山城白帝文庫 .
白水正 . 2017（予定）. 犬山城の歴史 .『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会 .
麓和善 . 2017（予定）. 建造物調査 .『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会 .
鈴木正貴 . 2017（予定）. 発掘調査 .『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会 .
千田嘉博 . 2017（予定）. 縄張り .『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会 .
山村亜希 . 2017（予定）. 近世絵図 .『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会 .